

1 次の文章を読んで、①～⑤に答えなさい。

二十一世紀のキーワードとして、しばしば「共生」という言葉が使われている。二十世紀は、巨大な科学技術を手にした人間が、己れの生存のために地球上の他の多くの生物を滅ぼし、ついには生態系を含む地球環境まで破壊しようとしてきた。だから二十一世紀は、「共生」の時代でなければならぬという。まことに尤もで、それ自体に異論はない。しかし都市計画から経済活動に至るまで、お題目のように「共生」という言葉が使われてみると、もともと生物学の用語であった「共生」の意味が、本当に理解されているのか疑わしくなってくる。

宗教学者の山折哲雄さんと対談する機会があった。山折さんは人間が己れのサバイバルのためにノアの方舟的な意味で「共生」などというのだったら、それはまだエゴイステックな自己生存戦略の延長にすぎない。そこにもう一つ共に死滅することを受け入れる「共死」というカードを入れた方がよいのではないかと、言われたのが心に残った。

山折さんの言葉をふまえて、「共生」という現象について、改めて思いをめぐらした。生物の「共生」は、一般には異なった種の生物が同一の場で生活することによって、互いに利益を得ている状態、つまり「相利共生」という現象を指すが、そのほかにも一方だけが他方を利用して利益を得る「単利共生」や「寄生」という状態も含まれる。人間はこれまで一方的に他の生物を自分のために利用してきたが、そこに限度が見え始めてきたいま、今度は利益を永続的に確保するために「共生」をはかろうとしているようだ。そうだとすれば、「共生」などといっても現在の「単利共生」の延長にすぎなくなる。

しかし生物界では、もう一つ凄みのある「共生」という現象が知られているのである。人間を含む動物の細胞は、もともと二種類の原始的生命体が「共生」することによって生まれたものらしい。遺伝情報であるDNAをためこんだ核を持つ原始的な単細胞生物の中に、もう一種類の、こちらは酸素を利用してエネルギー代謝だけが上手な原始的な藻類のような微生物が入り込んで、「共生」を始めた。

二つが同じ細胞膜の中で生活するようになると、一方はDNAという遺伝情報をどんどん蓄積し変化させながら徐々に複雑な生命活動を生み出し、一方はその生命活動のためのエネルギーの供給を有効に行うという形で共存するようになった。遺伝情報を蓄積していったのが細胞の「核」で、もっぱらエネルギー代謝に役立っているのが「ミトコンドリア」と呼ばれる細胞内の小器官である。

人間の体を構成するすべての細胞には、一つの核と三十ないし五十個のミトコンドリアが含まれているが、それらはもともと別の種の生物にユライしたものが「共生」しているのである。二種類の生物が「共生」したことで、生物は有効にエネルギーを利用して生命活動を円滑に行い、次々に遺伝情報を蓄積して進化し、ついには人間のようなスグレ物まで作り出した。薄気味悪いことに、人間はもともと二種類の異なった生命体が「共生」して作り出した産物だったのだ。

このように、生物学的「共生」の根源まで遡って考えてみると、「共生」が利益を分かち合って生き延びたというような生やさしいものではなかったことがわかる。「共生」した生命は、片方が死ねばもう片方も必然的に死ぬという運命まで共有している。最近ではミトコンドリアの方から死んでいく「死」と核の方から細胞の「死」がスタートすると、二種類の死のプログラムが存在することもわかった。山折さんの言われる「共死」は、生物が「共生」を始めたときに、すでに織り込み済みだった。「共死」する運命共同体として、「細胞」という生命がスタートしたのである。

二十一世紀のキーワードとして「共生」というとき、そこに本当に「共死」の覚悟まで含まれているかどうかを自問する必要があると思う。そうでなければ、「共生」は単なるお題目になってしまう。

カソのため山林の手入れができなくなると、森林が死んでゆく。森林が死ぬと人間も生きてゆけない、というような形での「共死」現象

が各所で起こっている。地球環境、政治、経済、都市、国際社会など、さまざまなリウイキで「共生」が合言葉のように使われるとき、同時にそこに「共死」への覚悟が求められていることを確認しなければなるまい。その覚悟を持った上で「共生」の夢を描かねば論になるであろう。(出典 多田富雄「共生と共死」)

- ① ①の部分⑦、⑧、⑨を漢字に直して楷書で書きなさい。
- ② 「宗教学者の……あった」とあるが、筆者がこの対談を取り上げた意図の説明として最も適当なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。
- (1) 「共死」という語を印象づけて、「共生」は必ず「共死」を引き起こすことを指摘し、「共生」は困難だと示唆するため。
- (2) 「共生」という現象を根拠として、一方的に他の生物を利用してきた人間の行為を批判し、現代の環境問題を検討するため。
- (3) 「共死」という発想を端緒として、生物学的「共生」の根源に言及し、「共生」という言葉の意味について考察するため。
- (4) 「共生」という概念を契機として、「相利共生」という新しい概念を提示し、真の「共生」の在り方を追究するため。
- ③ 「もう一つ……現象」とあるが、どういう点をふまえて「凄みのある『共生』」というのか。次の(1)～(4)から一つ選んで答えなさい。
- (1) 他の生物を単に利用するのではなく、互いに利益を与え合う点。
- (2) 別種の生命体が複雑な一生命体を生み、死の運命を共有する点。
- (3) 人間の細胞が、三十ないし五十個ものミトコンドリアを含む点。
- (4) 森林と人間の関係が示すように、お互いに依存し合っている点。
- ④ 「論」が……の部分⑩、⑪の「お題目」と同じ意味になるように、に入る適当な漢字一字を書きなさい。
- ⑤ 二十一世紀のキーワードとして「共生」という言葉を使うとき、筆者はどういうことが大切だと考えているか。現在の使われ方に対する筆者の認識をふまえて、百字以内で書きなさい。

2

次の文章を読んで、①～⑤に答えなさい。

わびという言葉は、すでに『万葉集』にもあらわれる古い語であるが、その意味するところは、勿論、嬉しい気分を示すものではない。時代が下るが「百人一首」にもわびがいくつも登場する。いずれも恋の歌。恋が実らないさびしさ、無念さという気分がわびであった。やがて、わびも世俗の欲望を投げすてて、風流に身をまかせようになると、隠者の生活感覚を表現する言葉に変質してきた。その背景には、中世的な隠者の美意識の成立が必要だった。たとえば兼好法師の『徒然草』に例をとってみよう。

花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものかは。雨にむかひて月を恋ひ、たれこめて春の行へ知らぬも。なほあはれになさけふかし。
(花は散つてしおれた) (やはりしみじみとして趣が深い) (そのまゝ) (咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ見所おほけれ。)

雨に向かつて月の姿を恋いもとめる状態がわびなのである。単に満月の欠けたところのない美しさを否定しているのではあるまい。むしろ、月が満月か否かではなく、雨雲に妨げられ満足に見えないところに意義がある。現実には見えないけれども、脳裏には美しい月が見えている。現実よりも理想に近い姿がイメージされているところこそ大切だろう。同じく『徒然草』の一節。

すべて、何も皆、ことのととのほりたるはあしき事なり。し残したるを、さてうち置きたるは面白く、いきのぶるわざなり。内裏造らるるにも、必ず、作り果てぬ所を残す事なり。
(そのまゝ) (ほつと思がつけるやり方である)

すべて完全にととのっているのはよろしくないという。仕残したところがあるのが面白い、だから宮中の造営などでも未完成の部分を残しておくのがよいという。完全無欠な状態、すなわち「」状態がよくないというのだから、これは不完全の美ともいえよう。しかし、私は不完全の美という言葉はあまり適当でないと考えている。完全、不完全という二次的なとらえ方をこえた見方が必要だ。不完全は完全を包含し、完全はうちに不完全を含みこんでいるのだ。

(出典 熊倉功夫「茶の湯の歴史」)

国(注)(3) 隠者——俗世間を離れ、仏道修行や悠々自適の生活を送る者。

① 「月は……見るものは」の意味として最も適当なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。

(1) 美しい月は酒を飲みながら見るのがよい。

(2) 美しい月はなかなか見えないものだなあ。

(3) 月は曇りのない満月だけを見るものなのだよ。

(4) 月は曇りのない満月だけを見るものではない。

② 「なほあはれになさけふかし」を音読するときに、注意すべききまりを書きなさい。

③ ㊦に入れるのに適当なことばを『徒然草』の原文中から十字以内で抜き出して書きなさい。

④ 「中世的な隠者の美意識」を説明した次の文の□に入れるのに適当なことばを文章中から十五字以内で抜き出して書きなさい。

完全無欠でないからこそ、□が想像できるといふ考え。

⑤ 本文で述べられた美意識をもって、俳句や短歌という文学表現をみるとき、そのよさはどのように言えるか。具体的に説明しなさい。

3

次の文章を読んで、①～⑥に答えなさい。

著作権者の了解が得られないため削除しています。